

## 松井先生と私

藤巻裕蔵

072-0005 美唄市東4条北2丁目6-1

「ハイ、松井です」。いつも松井先生から電話がかかってきたときの第一声である。だいたい電話がかかってくるのは、なにか依頼事項があるときである。明るい声で、この挨拶から始まると、多少のことではお断りできなくなってしまう。しかし、もうこのような声を聞くこともできなくなってしまった。最近お会いしたのは、浜頓別で白鳥の会の研修会が開催された2003年4月である。このときには、往復の列車、音威子府～浜頓別往復のバスでも一緒であったが、これが先生とお会いする最後の機会になってしまった。

私と松井先生との出会いは、日本白鳥の会のできる前である。まだ大学院に在学中のことであったから、1960年代前半のことであったとおもう。当時、北海道で野生動物を対象として写真を撮影している人はまだ少なかった。そのためか、自然発生的に野生動物の写真に関心のある人たちが集まり、北海道野生動物写真研究会を結成した。私はとくに写真をよく撮影するほうではなかったが、ネズミや鳥の調査の合間に300mmのレンズをつけたカメラで偶然に出会った動物を撮っていた。そんなところから、私もこの研究会に参加させていただいたわけである。手元に保存してある野生動物写真展のパンフレットを見ると、第2回写真展の開催が1966年10月であったので、第1回はその前年だったはずである。数回の写真展で、松井先生の出品作品はほとんどがオオハクチョウであった。

このようなきっかけで、松井先生と知り合うことなり、日本白鳥の会設立の際には、会員になるよう誘われた。松井先生が白鳥の会を設立されるようになったきっかけは、

ハクチョウの写真撮影で全国をまわっているうちに、各地のハクチョウ渡来地で保護活動にたずさわっている人々との交流であったと聞いているが、会員にはハクチョウの保護活動に関係のある人たちだけではなく、ハクチョウに関心を持っている人を広い範囲で勧誘していたのであろう。

私は、小さいときから動物が好きで、中学生のころからは野外で鳥の観察を始め、鳥を見るのが趣味の一つであった。高校時代には、隅田川の両国橋付近でユリカモメを観察したり、千葉県の新浜でシギ・チドリ類を観察していた。しかし、その後野ネズミや鳥を研究対象にするようになり、これらの生態の研究を進める中では、動物の生活と自分の生活とを切り離して考えるようになっていた。これとは別の生き方もあるのだと教えてくれたのが、松井先生の「白鳥の幻想」（「鳥の歳時記5、冬の鳥」に掲載、学習研究社、1983年）である。この文の中では、ハクチョウとの出会いに始まり、保護活動から国際的なハクチョウ・シンポジウムの札幌開催までのさまざまな活動が紹介されているだけでなく、本業の診察の合間をぬってのハクチョウの撮影、撮影のために歩くことを心臓病後の健康回復に生かしたりすることが書かれている。まさにハクチョウが普段の生活の一部になっているのである。この文からは、松井先生のハクチョウに対する熱い思いが伝わってきたし、読んだときの印象は強烈であった。松井先生というと、いつも思い出すのはこの「白鳥の幻想」のことである。

松井先生は、国内での活動だけではなく、国外との交流にも熱心であった。渡り鳥であるハクチョウの保護のためには、国内だけではなく、国外の状況の把握、情報交換の必要性を強く感じていたからだとおもう。上記の札幌でのシンポジウム開催のほかに、私が記憶しているだけでも、日本白鳥の会としてイギリスのスリムブリッジをはじめとする水鳥保護区の視察旅行、ロシアの研究者を招いての話し合い(写真参照)、サハリン州政府の野生動物担当者ズドリコフさんの北海道への招待・道内ハクチョウ渡来地視察、サハリンへのハクチョウ渡来地と渡り時期のハクチョウ生息状況の視察、レナ川中流部におけるハクチョウ調査などを実施した。私はこれらの交流・調査に一会員として参加させていただいた。レナ川の調査のさいは、松井先生は健康状態がおもわしくなく、残念ながら参加を見合わせなければならなかったが、それ以外ではいつも先頭に立って活動されていた。

葬儀の式場で、松井先生は白いキクの花の模られたハクチョウに囲まれていた。先生にとって最後までハクチョウが生活の一部であったのだと改めて強く感じた。今はハクチョウとともに大空を飛んでいるのではとおもう。